

# 元AV女優の義母の有り余る性欲 巨根の息子とシャ ワールームでセックス

「ユウキ、ちょっと買い物へでも行かない？」

義母のミサヨがユウキに言った。

ユウキは現在38歳になるミサヨとこの家で3年暮らしている。

3年前父親が再婚した際はそれなりに動揺したのを覚えているが、時間が経過し成長し、

共に過ごす日々を重ね今となっては当たり前になった。

将来は自動車の整備士になろうと考えているユウキ。

遠く離れた街へ出て専門学校へ進学する予定だ。

あまりミサヨから一緒に出かけようという誘いは少ないので、不思議な気持ちになったユウキ。

車を走らせ30分ほどかけて街のはずれに行くことに。

「どこへ行くの？買い物って言ってたけど・・・」

「いいところよ、いいとこ・・・ふふ」

ミサヨはハンドルを握りながら横目でユウキを見て怪しげな微笑みを見せた。

運転席のこげ茶色の皮シート座席に座るミサヨはミニのジーパンを穿いている。

濃い青色である。そこから出る太めの太ももは白く、だけど生まれつきの多少の地黒でかすかに肌色の割合が濃い。

あとわずかでその朝穿いた白い下着が見えそうだ。

ユウキはごくりと唾を飲みこんだ。喉ぼとけが縦下に、しかしかすかに前にもグルッと回るように動く。

このところ、ユウキは女性というものに興味が一心に注がれている。

生活の全てがそれといっても過言ではない。

きっかけは深夜のエッチなテレビ番組である。

セックス、を題材に女性たちがトークを繰り広げていた。

学校ではほぼ習わない性的な教材にユウキの心は動き、それ以来、入浴するたびにブランと垂れ下がった

ペニスが起き立つ日々が続いた。

窓の外は晴れ。車がスピードを上げる度、素早く景色が後ろ後ろへと遠ざかっていく。

何度も通った街中の景色である。

そして辿りついたのは砂利の駐車場。すぐそばには街と街とを分ける小さな山。麓（ふもと）というほどでもないが、民家は少ない山のそばの集落地である。

昼間にしてはめずらしくチカチカとピンライトが店の軒先の屋根の雨どいのところに飾ってある。

どことなく不気味な雰囲気漂っている。

かなり怪しいとユウキは感じた。服でも買いに行くのかと思っていたので。

軒をくぐると小太りの店長がミサヨに微笑んだ。

「久しぶりだねえ」

・・・・・・・・・・。

しばらく二人は親し気に話していた。

ここでユウキは過去の母を知ることになる……。

AV女優？

————— 体験版は以上になります。 —————